

8/18 Tue.

大成建設 presents 読響サマーフェスティバル2026《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール 18時30分開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2026 "THE GREATEST CONCERTOS", presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 18:30

指揮
Conductor

ヴァイオリン
Violin

チェロ
Cello

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

角田鋼亮 *-p.7*
KOSUKE TSUNODA

佐々木つくし *-p.10*
TSUKUSHI SASAKI

水野優也 *-p.10*
YUYA MIZUNO

角野未来 *-p.11*
MIRAI SUMINO

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] *-p.13*
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

チェロ協奏曲 口短調 作品104 [約40分] *-p.14*
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23 [約32分] *-p.15*
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

8/22 Sat.

大成建設 presents 読響サマーフェスティバル2026《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2026 "THE GREATEST SYMPHONIES", presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

コンサートマスター
Guest Concertmaster

シューベルト
SCHUBERT

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

福村太一 *-p.8*
TAICHI FUKUMURA

白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

交響曲 第7番 口短調 D759《未完成》[約25分] *-p.17*
Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

交響曲 第5番 ハ短調 作品67《運命》[約31分] *-p.18*
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界から》
[約40分] *-p.19*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

9/8 Tue.

第661回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.661 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
コンサートマスター
Guest Concertmaster

マーラー
MAHLER

ユライ・ヴァルチュハ (首席客演指揮者) -p.9
JURAJ VALČUHA
白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

交響曲 第6番 イ短調 〈悲劇的〉 [約80分] -p.20
Symphony No. 6 in A minor, "Tragische"
I. Allegro energico, ma non troppo
II. Andante moderato
III. Scherzo
IV. Finale

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

9/13 Sun.

第152回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.152 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

9/15 Tue.

第695回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.695 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
第1コンサートマスター
First Concertmaster

シベリウス
SIBELIUS

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

ユライ・ヴァルチュハ (首席客演指揮者) -p.9
JURAJ VALČUHA
セルゲイ・ハチャトゥリアン -p.11
SERGEY KHACHATRYAN
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47 [約31分] -p.23
Violin Concerto in D minor, op. 47
I. Allegro moderato
II. Adagio di molto
III. Allegro, ma non tanto

交響曲 第10番 木短調 作品93 [約57分] -p.24
Symphony No. 10 in E minor, op. 93
I. Moderato
II. Allegro
III. Allegretto
IV. Andante – Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール (9/13)
※9/15公演では日本テレビの収録が行われます。

9/19 Sat.

第290回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.290 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/20 Sun.

第290回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.290 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
ヴァイオリン
Violin
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

グラズノフ
GLAZUNOV

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

ユライ・ヴァルチュハ (首席客演指揮者) -p.9
JURAJ VALČUHA

金川真弓 -p.12
MAYUMI KANAGAWA

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

演奏会用ワルツ 第1番 ニ長調 作品47 [約11分] -p.27
Concert Waltz No. 1 in D major, op. 47

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] -p.28
Violin Concerto in D major, op. 35
I. Allegro moderato – Moderato assai
II. Canzonetta : Andante – III. Finale : Allegro vivacissimo

交響的舞曲 作品45 [約35分] -p.29
Symphonic Dances, Op. 45
I. Non allegro
II. Andante con moto
III. Lento assai – Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

角田鋼亮

KOSUKE TSUNODA, Conductor

読響・夏の名曲選 鮮やかな《三大協奏曲》



©Makoto Kamiya

各地で活躍の幅を広げ続ける次世代を担うマエストロが、若き3人のソリストを盛り立てて三つの傑作協奏曲を披露する。

1980年名古屋市生まれ。東京芸術大学大学院指揮科並びにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。2006年、第3回ドイツ全音楽大学指揮コンクールで最高位を獲得。08年カラヤン生誕100周年記念のため行われた同コンクールでは第2位に入賞した。そのほか16年の第11回名古屋ペンクラブ音楽賞、20年の令和元年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞、名古屋市文化振興事業団第36回芸術創造賞など多数受賞。10年の第3回マーラー国際指揮者コンクールでは最終の6人に残った。

これまでにベルリン・コンツェルトハウス管、ブランデンブルク響、上海歌劇院管、札幌響、山形響、群馬響、NHK響、東京都響、東京響、東京フィル、日本フィル、新日本フィル、名古屋フィル、京都市響、広島響、九州響などと共演している。15年よりセントラル愛知響の指揮者を務め、19年に常任指揮者に就任。就任記念としてオクタヴィア・レコードよりリリースしたラフマニノフの交響曲第2番とモシュコフスキの組曲〈諸国から〉を収録したCDは、重厚な音楽づくりと色彩豊かなタクトが高い評価を得た。16年から20年まで大阪フィル、18年から22年まで仙台フィルで指揮者のポジションを務めた。現在セントラル愛知響音楽監督を務めている。読響とは18年10月以降、たびたび共演を重ねている。

8/18
三大協奏曲

Maestro

8/22
三大交響曲

Maestro

指揮

福村太一

TAICHI FUKUMURA, Conductor

クラシック音楽の王道 傑作交響曲を一挙指揮！



©Alan Luntz

2023年にマーラー国際指揮者コンクールで第2位に入賞して注目を浴びた気鋭が、三つの傑作交響曲〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉に熱い思いを込める。

東京で生まれ、幼少期をボストンで過ごす。3歳よりヴァイオリンを始め、ボストン大学でヴァイオリン演奏の学士号を取得。ノースウェスタン大学でヤンパルスキーに師事し、指揮科修士課程と博士課程を修了。その後、シカゴ響の副指揮者に就任したほか、アスペン音楽祭に客演副指揮者として出演。ミュンヘン・フィルでアシスタント・コンダクターに選出されて研鑽^{けんさん}を積む。アメリカを拠点に活躍する若手指揮者を対象としたショルティ財団のキャリア支援賞を4度受賞。24年からはイリノイ響の音楽監督に就任し、大胆な舞台表現と卓越した技巧で高く評価されている。また、同楽団のレパートリー拡大のため現代作曲家の作品を積極的に取り上げており、今年5月にはシカゴ出身の作曲家ミシェル・アイザックの新曲〈Reverie on the Mother Road〉を世界初演した。また、25年からはクリーヴランド管の副指揮者の任にもある。

これまでにユタ響、ノースカロライナ響、シカゴ・フィル、ユージーン響、デラウェア響、コロラドスプリングス・フィルなどを指揮。今年5月にはベルリン・フィルの公演で名匠ペトレンコのアシスタント・コンダクターを務めた。読響初登場。今回の公演が日本デビューとなる。

指揮

ユライ・ヴァルチュハ

(首席客演指揮者)

JURAJ VALČUHA, Principal Guest Conductor

鬼才ヴァルチュハが挑む 超重量級のプログラム！



©読響

ベルリン・ドイツ・オペラやヒューストン響などで活躍するヴァルチュハが、マーラー〈悲劇的〉、ショスタコーヴィチ第10番など濃厚な3プログラム・5公演に登場する。

2024年4月から読響の首席客演指揮者を務める鬼才。ブラチスラヴァで作曲と指揮を学んだ後、サンクトペテルブルク音楽院とフランス国立高等音楽院で学び、ムーシンらに師事。フランス国立管デビューをきっかけに欧米で活躍中。09年から16年までRAI国立響の首席指揮者を務め、ウィーン、ベルリン、デュッセルドルフなどへのツアーで成功を収めた。16年から22年までナポリ・サンカルロ劇場の音楽監督を務め、同劇場の水準を高めた手腕が高く評価された。17年から23年までベルリン・コンツェルトハウス管の首席客演指揮者、22年からヒューストン響の音楽監督を務めている。

これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ドレスデン国立歌劇場管、ニューヨーク・フィル、ウィーン響、ミュンヘン・フィル、シカゴ響などに客演し、古典から現代作品まで幅広いレパートリーで活躍している。バイエルン国立歌劇場で〈蝶々夫人〉、ベルリン・ドイツ・オペラで〈エレクトラ〉、ボローニャ歌劇場で〈サロメ〉、フェニーチェ劇場で〈ピーター・グライムズ〉などを指揮。近年はローマ歌劇場で〈イエヌーファ〉を、ベルリン・ドイツ・オペラで〈トリスタンとイゾルデ〉を指揮し、好評を博した。

9/8
定期

9/13
横浜マチネー

9/15
名曲

9/19
土曜マチネー

9/20
日曜マチネー

Maestro



©Taira Tairadate

ヴァイオリン

佐々木つくし

TSUKUSHI SASAKI, Violin

歌心のある音色で聴き手を魅了する新鋭。東京都生まれ。東京芸術大学を卒業後、現在はベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミーに在籍している。2024年、第75回ブラハの春国際音楽コンクールのヴァイオリン部門で第1位を受賞。その後、第80回ブラハの春国際音楽祭にてブラハ放送響とプロコフィエフの協奏曲第1番で共演し大きな成功を収めた。第87回日本音楽コンクール第2位、第18回東京音楽コンクール弦楽部門第2位など入賞多数。ソリストとしてベルリン・コンツェルトハウス管、ホーフ響、ブラハ・フィル、ブラハ放送響などと共演。使用楽器は、笹川音楽財団(旧：日本音楽財団) 貸与のガールネリ・デル・ジェズ「ムンツ」(1736年製)。読響初登場。

確かな技術と豊かなサウンドで世界に羽ばたく実力派チェリスト。1998年東京都生まれ。2025年、第76回ブラハの春国際音楽コンクールのチェロ部門でアジア人として初優勝を果たした。第89回日本音楽コンクール第1位、第13回東京音楽コンクール第1位および聴衆賞、第23回コンセール・マロニエ21第1位、24年エンリコ・マイナルディコンクール第1位など、国内外の主要コンクールで高い評価を得る。ブラハ響、東京響、東京フィル、日本フィル、大阪響、京都市響などと共演。ソリストとしての活動に加え、リサイタルや室内楽公演、国際音楽祭への出演など幅広い活動を展開している。読響には18年以来、2度目の登場。使用楽器は1710年製 PIETRO GIACOMO ROGERI (公益財団法人サントリー芸術財団)、弓は F. TOURTE (住野泰士コレクション) を貸与されている。



©Yuji Ueno

チェロ

水野優也

YUYA MIZUNO, Cello



ピアノ

角野未来

MIRAI SUMINO, Piano

みずみず

瑞々しく芯のある音色で人気を博す新鋭ピアニスト。東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京芸術大学を経て同大学院音楽研究科を修了。大学卒業に際してアカンサス音楽賞、同声会賞、芸大クラヴィーア賞を受賞。2023年からフランスに拠点を移し、リヨン国立音楽院マスター課程に在学中。アンリ・コワルスキ国際コンクール第1位、第21回東京音楽コンクール第3位をはじめ国内外のコンクールで多数入賞。20年度青山音楽財団奨学生。これまでに東京響、東京フィル、日本フィル、東京シティ・フィル、大阪フィルなど数々の楽団と共演している。近年ではカーネギーホールでの演奏会「The Passion of Music」に出演するなど、活動の幅を広げている。読響初登場。

鮮やかな音色で魅了するアルメニア出身の才人。2000年シベリウス国際コンクールで史上最年少優勝を果たし、05年エリザベート王妃国際音楽コンクールでも第1位を受賞。以降、サンフランシスコ響、クリーヴランド管、フランクフルト放送響、スイス・ロマンド管など欧米の主要楽団に客演。アルメニア国立フィルとの北米ツアーでカーネギーホールなどに登場した。ナイーヴよりリリースした「My Armenia」はエコー・クラシック賞を受賞したほか、シベリウスなどの協奏曲の録音も高く評価されている。近年は、ルツェルン音楽祭でウィーン・フィルとベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲で共演して絶賛された。使用楽器はストレットン・ソサエティより貸与されている1724年製ストラディヴァリウス「Kiesewetter」。



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

セルゲイ・ハチャトゥリアン

SERGEY KHACHATRYAN, Violin

9/19

土曜マチネー

9/20

日曜マチネー

Artist



ヴァイオリン

金川真弓

MAYUMI KANAGAWA, Violin

音楽への飽くなき探究心と、豊潤かつ深い音色で国際的に活躍する気鋭。ドイツ生まれ。ハンス・アイスラー音楽大学でブラッハーに師事。2019年チャイコフスキー国際コンクール第4位、18年ロン＝ティボー国際コンクール第2位入賞及び最優秀協奏曲賞を受賞。24年ジョルジュ・エネスク国際コンクール優勝。ベルリン・コンツェルトハウス管、ロイヤル・フィル、ドイツ・カンマーフィル、フィンランド放送響、マリインスキー劇場管などと共演。ニューヨーク、ロサンゼルスを経て、現在はプレーメン芸術大学で教えながらベルリンを拠点に演奏活動を行う。読響とは21、23、24年と共演し、絶賛された。使用楽器は、笹川音楽財団（旧：日本音楽財団）貸与のストラディヴァリウス「ウィルヘルミ」（1725年製）。

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 木短調 作品64

すぐれた指揮者・ピアニストとしても活躍したフェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）のヴァイオリン協奏曲は、彼が指揮者を務めていたライプツィヒ・ゲヴァントハウス管のコンサートマスターだったフェルディナント・ダーヴィトのために作曲された。メンデルスゾーンは、裕福な環境で育ち、子どもの頃から音楽の才能を発揮し、13歳のときにはヴァイオリン協奏曲 二短調という楽曲も残した。メンデルスゾーンは、苦勞知らずの天才というイメージが強い作曲家であるが、近年の研究で作品には推敲を重ねていたことがわかってきた。この協奏曲もダーヴィトとヴァイオリンの演奏技法について検討を重ね、手直しを加えたことが明らかにされている。協奏曲としては一般的な急・緩・急の3楽章構成をとりながら、交響曲第3番〈スコットランド〉などと同様に、各楽章を切れ目なしに続けて演奏するという着想が盛り込まれている。なお、初演ではダーヴィトが独奏者を務めたが、メンデルスゾーンは病氣療養中のため、副指揮者を務めていたニルス・ガーデが指揮を担当した。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート（木短調、2分の2拍子）は、ソナタ形式をとる。2小節目からヴァイオリン・ソロが有名なテーマを奏で出し、均整のとれた形式美とロマンティックな情緒が絶妙なバランスで鳴り響いていく。カデンツァは展開部と再現部の間に配されている。ファゴットの響きが残り、続けて演奏される**第2楽章** アンダンテ（ハ長調、8分の6拍子）は三部形式の緩徐楽章。切れ目なく奏される**第3楽章** アレグレット・ノン・トロoppo（木短調、4分の4拍子）～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ（木長調、4分の4拍子）は序奏付きのソナタ形式により、主部は対照的な二つの主題が提示され、鮮やかなフィナーレを形作っていく。

〈満岡信育 音楽評論家〉

作曲：1842～44年9月／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

8/18

三大協奏曲

Program Notes

ドヴォルザーク

チェロ協奏曲 口短調 作品104

ボヘミア（現在のチェコ西部）の小村で生まれたアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、オーケストラのヴィオラ奏者や教会のオルガン奏者を務めながら作曲を続けた。1865年にはピアノ伴奏版のかたちでチェロ協奏曲 イ長調を残している。やがて国際的な名声を博したドヴォルザークは、ニューヨークのナショナル音楽院の院長に招かれ、1892年に渡米。同郷のボヘミア出身のチェロの名手ヴィハンにチェロ協奏曲の作曲を求められ、1895年2月までに大部分の作曲を終えた。アメリカでの任期終了後、チェコに帰国して第3楽章の終結部を書き上げ、見直しや改訂を加え、同年6月1日に完成したと伝えられている。完成前にスコアを見たヴィハンは、数々の要望を作曲者に伝え、終楽章の結尾に自ら書いたカデンツァを示したが作曲者から拒絶され、初演はレオ・スターンの手によって行われた。ヴィハンが当作品を演奏したのは、それから3年後のことである。このチェロ協奏曲の独奏パートは、高音域で切々と歌う場面が盛り込まれ、オーケストラパートがシンフォニックに書かれているのが特徴である。大半は新大陸で書かれたものの、全編にわたって濃厚なボヘミア情緒に彩られている。

第1楽章 アレグロ（口短調、4分の4拍子）は、協奏風ソナタ形式をとり、気宇壮大なオーケストラの提示部に続いて、独奏チェロが登場する。スラヴ色濃厚な第1主題に対して、第2主題は牧歌的な性格を備えている。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロppo（ト長調、4分の3拍子）は、三部形式による緩徐楽章で、義姉ヨゼフィーナの死を悼んで、彼女が好きだった《4つの歌曲》作品82の第1曲〈ひとりにして〉の中間部が引用される。

第3楽章 アレグロ・モデラート（口短調、2分の2拍子）は、ロンド形式のフィナーレで、黒人霊歌やボヘミアの民俗舞踊のリズムが活用され、クライマックスを形づくる。

〈満岡信育 音楽評論家〉

作曲：1894～95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー

ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 作品23

ロシアの法務省の役人を経て、23歳の時に音楽院に入学したピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、当時の大作曲家には珍しく、コンサート・ピアニストとしての活動歴が皆無だった。その彼が、モスクワ音楽院で教鞭^{きょうべん}をとっていた時代にピアノ協奏曲第1番を作曲する。モスクワ音楽院長だったニコライ・ルビンシテインらの前で試演したが、酷評され、書き換えることを求められた。しかし、作曲者は自己の信念を曲げることなく、1875年2月にオーケストレーションを完成させた。楽譜は、ドイツの名指揮者兼名ピアニストで、ベルリン・フィルの基礎を築いたハンス・フォン・ビューローのもとに送られ、アメリカのボストンで初演が行われた。その後、ビューローらの意見を取り入れて2度にわたって改訂が施され、現在演奏されている形に整えられた。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストーソ（変ニ長調、4分の3拍子）～アレグロ・コン・スピリット（変口短調、4分の4拍子）は、序奏付きのソナタ形式。華麗で長大な序奏で登場する魅力的な主題は、この後、再登場することがない。主部の第1主題は、妹の嫁ぎ先であるウクライナのカメンカに滞在した際に耳にしたウクライナ民謡に基づいている。再現部にカデンツァが配され、華やかなコーダに至る。

第2楽章 アンダンティーノ・センブリーチェ（変ニ長調、8分の6拍子）は、三部形式を採り、夜想曲を思わせる主部に対して、中間部は加速してスケルツォ風の音楽となり、フランスのシャンソン〈楽しんで踊って〉が引用される。

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ（変口短調、4分の3拍子）は、ロンド形式とも自由なソナタ形式ともとれる狂詩曲的な性格を備えている。主要主題は、ウクライナ民謡〈さあ、イヴァンカ〉が用いられ、ピアノとオーケストラがエキサイティングに競い合う。

〈満岡信育 音楽評論家〉

作曲：1874～75年（改訂：1879年、1888～89年）／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト

交響曲 第7番 口短調 D759 〈未完成〉

8/22
三大交響曲

Program Notes

フランツ・シューベルト (1797～1828) の代表作として知られるこの交響曲は、「未完成」の通称のとおり第2楽章までしか完成されていない。なぜ2楽章で作曲を打ち切ったかについては諸説あるが、どれも確証はない。1822年秋にオーケストレーションが始められたことはわかっているが、第3楽章冒頭で筆が置かれ、そのまま放置された。その後1823年にグラーツの音楽協会の名誉会員に選ばれたシューベルトは返礼として1824年にこの2楽章だけの交響曲を、協会と関わりのあった友人のヒュッテンブレンナーに送付した。ヒュッテンブレンナーは残る二つの楽章が後で送られてくるものと考えたのか、その楽譜を机にしまいこみ、そのためこの作品は長らく世に知られないまま眠ることになる。これが日の目を見たのは作曲者の死後37年を経た1865年のことで、指揮者J. ヘルベックによって発見され同年ウィーンにおいて彼の指揮で初演され、以後“完結した”未完の交響曲として親しまれるようになったのだった。作風はそれまでのシューベルトの交響曲には見られない深いロマン的なスタイルを示しており、彼の後期の様式を先取りしたものとなっている。なおこの交響曲は、今日ではシューベルトの新しい作品目録に従って第7番とされているが、かつては第8番として知られていた。

第1楽章 アレグロ・モデラート 冒頭に短い序奏が置かれ、低音で不気味に示される序奏主題はこの楽章全体の重要な要素となる。主部はソナタ形式、暗い第1主題と歌曲風の優しい第2主題を持ち、ドラマティックな激しさとロマン的な詩情の交錯のうちに発展し、展開部では起伏に満ちた盛り上がりが見られる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート ロマンティックな^{しょうけい}憧憬の気分に満ちた叙情溢れる緩徐楽章で、夢見るような美しい旋律が紡ぎ出されていくが、その裏で不安定に移ろう情緒がデリケートな表情の変化を作り出す。

〈寺西基之 音楽評論家〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は古典派の様式から出発したが、中期になると古典的な枠を超える拡大された形式による劇的な様式を追求するようになる。そうした中期の作風の頂点ともいえるのが1808年に完成された交響曲第5番である。新しい様式の可能性を様々な角度から開拓していた当時の彼の姿勢が如実に示された作品で、曲頭のタタターの動機に象徴される闘争的性格、作品全体の暗→明の構図など、苦悩を克服して勝利に至るという理想主義的な理念が表し出されている。そうした理念の表現のために、この作品には様々な斬新な書法が打ち出されている。第1楽章全体を徹頭徹尾タタターという動機のみで構築する手法はそのひとつ。この動機を全曲に循環的に用いていることも注目すべきで、それによって全体の暗から明への流れが明確にされている。また第3楽章から勝利の第4楽章へクレッシェンドで休みなく連続させて、明への移行を劇的なものとしたことも画期的だ。さらにその第4楽章では、当時交響曲には通常用いられなかったトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットを採用して勝利感を強調する。革新家ベートーヴェンの面目躍如たる作品である。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ タタターのモットー動機で構築された緊迫感溢れるソナタ形式。叙情的な第2主題にもその動機が纏わり付く。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 他の楽章とは対照的に優美な主題を持つ穏やかな緩徐楽章で、形式はかなり自由だが、変奏の手法が用いられている。

第3楽章 アレグロ モットー動機を織り込んだスケルツォと明朗で力強いトリオからなる。そして劇的な移行部を経てそのまま次の楽章に続く。

第4楽章 アレグロ 明るい勝利のフィナーレ。再現部直前に苦悩を回想するようにモットー動機が現れるが、全体は輝かしい昂揚感に満ち溢れている。

〈寺西基之 音楽評論家〉

作曲：1804~08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

ボヘミア(現在のチェコ)の民族主義的な芸術音楽を追求した作曲家として知られるアントニン・ドヴォルザーク(1841~1904)だが、後期の一時期には、ニューヨークのナショナル音楽院の院長としてアメリカで活動している。この交響曲第9番はまさにそのアメリカで生活していた1893年に書かれている。アメリカ時代の彼は、アメリカの民俗音楽や新大陸の文化に努めて触れようとする一方で、故国ボヘミアを思う心が募って強度のホームシックにも陥った。そうした中で書かれたこの交響曲も、いくつかの主題などに黒人霊歌などアメリカの音楽との関連性を示しつつも、それすらボヘミアの民俗音楽の特徴と重ね合わせるような性格付けがなされていて、本質的には故国への思いを示したようなボヘミア色豊かな作品となっている。アメリカの詩人ロングフェローの叙事詩『ハイアワサ』に感銘を受けて書かれたといわれる第2楽章にしても、そこで表現されているのはノスタルジックな感情といえるだろう。ドヴォルザーク自身によって付けられた「新世界から」という題名にも、異郷から故国を思う彼の心情が窺い知れる。

第1楽章 アダージョ〜アレグロ・モルト 冒頭の序奏は沈んだ気分が始まって、突如激情を露わにする。続く主部は起伏溢れるソナタ形式で、その第1主題(すでに序奏のうちに予示されている)は全楽章をとおしての循環主題となる。

第2楽章 ラルゴ ノスタルジックな情感に満ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンの吹く主要主題は有名で、日本ではかつて「家路」の題で親しまれた。

第3楽章 スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ 民俗舞曲風のスケルツォ。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 情熱的な激しさと郷愁感に満ちた叙情の交錯のうちに劇的に発展していくソナタ形式のフィナーレ。前の3つの楽章の主題も回想され、最後は長く引き伸ばされた和音の余韻のうちに全曲を閉じる。

〈寺西基之 音楽評論家〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル)、弦五部

マーラー

交響曲 第6番 イ短調〈悲劇的〉

1904年9月初頭、オーストリアのヴェルター湖畔、マイヤーニックの別荘からウィーンに戻ったグスタフ・マーラー（1860～1911）は友人にこう報告した。「第6番が完成した——やりきった!」。当時ウィーン宮廷歌劇場の監督を務めていたマーラーは、例年通り夏休みを作曲に充て、北イタリアはドロミテへの2回の小旅行を機に交響曲第6番の終楽章のスケッチを数週間のうちに書き上げた。かねて「第6番は私の最初の5作品を理解し、消化した世代だけが近づくことのできる謎を提示する」と述べていた作曲家は、この難解な新作をどこで初演すべきか逡巡していた。

初演の地として選ばれたのは、ドイツはルール地方の大都市エッセン。111人編成のオーケストラとともに、7回のリハーサルおよびゲネプロを入念に行った上で、1906年5月27日、第42回ドイツ楽友協会音楽祭の最後を飾る大舞台で、第6番はマーラー指揮のもと初演された。この複雑な作品を聴衆が事前に予習できるよう、初演の1週間前に総譜や四手ピアノ編曲版を出版するという周到さも功を奏し、彼の新しい交響曲は大きな拍手で迎えられた。

初演に向けたリハーサルでは、作品に種々の変更が施された。内容は多岐にわたるが、その一つが中間楽章の順序である。初版総譜ではスケルツォ、アンダンテの順だったが、初演の直前に緩徐楽章を先に置く形へと改められた。この順序を巡っては、今日にいたるまで決定的な解釈はなされていないが、初演時の作曲家の解釈を尊重してアンダンテにスケルツォが続く形で演奏されることも多い。

全4楽章からなる長大な第6番でとりわけ大きな役割を果たすのは、**第1楽章**冒頭の行進曲と、それに続いて現れるトランペットおよびオーボエによるイ長調→イ短調と変化する長短調和音の連続である。これらは性格・テーマ・リズムの骨組みとなり、第1楽章のみならずスケルツォや終楽章にも登場し、全体を繋ぎ合わせる強固なかすがいとして機能する。その対極ともいえるのが、明確な楽音を持たず不規則なリズムを刻むカウベルであろう。ドロミテの放牧風景を想起させ、しばし時が止まったかのような表現領域へと聴衆を誘うこの楽器は、舞台裏に配置されることで多層的な音響を生み出す。

第2楽章 アンダンテは、二つの主題が並行する構図ではじまる。イングリッシュ・

ホルンに導かれる叙情的な調べを経て、中盤で広がるのはカウベルを伴った幻影的な音空間だ。やがて冒頭の主題が回帰すると、そこに対旋律として新たなカンティレーナ（叙情的な旋律）が浮かび上がる。この旋律に導かれて音楽が歩みを進めるうち、当初支配的であった主題は後景へと退き、楽章はコーダへと至る。

続く**第3楽章** スケルツォでは、第1楽章の行進曲主題に関連する主部が、二つのトリオを挟んで繰り返される。ただし第1楽章とは異なり、そのモチーフは多様な和声や旋律型によって彩られ、さらには弦楽器の特殊奏法によるノイズ的な要素もあり、変奏の可能性が極限まで高められている。哲学者のテオドール・アドルノが「最小限の素材からいかに最大限の多様な性格が蒸留されるか」と論じたとおり、この楽章からは滑稽、グロテスク、ユーモアといった様々な表情が聴き取れよう。トリオでは対位的な手法が駆使され、作曲家の生前には「近代化されたバッハ」とさえ評されたほどだ。楽章の結びには、長短調の和音進行が循環主題のごとく6回にわたって現れる。

第4楽章 におけるハンマーは、妻のアルマによれば「マーラー自身の破滅、もしくは彼がのちに述べたように、彼の英雄の破滅」を描くものだという。音響効果に加え、その視覚効果は「圧倒的で運命的なもの」の象徴であると解釈されることも少なくない。イ長調で輝かしく終結した第1楽章とは対照的に、暗黒と絶望に終わる終楽章。この形式は、ベートーヴェン以来の交響曲の伝統であった「苦悩から栄光へ」というドラマトゥルギーを逆転させる挑発的かつ画期的なものとなった。最終的に、イ短調の和音が二人のティンパニ奏者による行進曲のリズムに支えられて響き渡ること、作品全体を貫く長短調の和声変化が凝縮されるとともに、マーラーによる交響曲の新たな形が示される。

〈内藤真帆 音楽学〉

作曲：1903～05年／初演：1906年5月27日、エッセン（作曲者指揮）／演奏時間：約80分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4、コントラファゴット、ホルン8、トランペット6、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、銅鑼、鐘、カウベル、ハンマー、ルーテ）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

シベリウス

ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47

9/13
横浜マチネー

9/15
名曲

Program Notes

フィンランドの国民的作曲家として知られるジャン・シベリウス（1865～1957）は、7つの交響曲と数々の交響詩によって20世紀前半の交響楽に独自の道を切り拓いた。だがもともと彼はヴァイオリニストを志し、ウィーン・フィルのオーディションを受けたほどの腕前の持ち主でもあった。その果たされなかった夢を注ぎ込んだのが、彼の残した唯一の協奏曲である本作である。ヘルシンキで親交を結んだ名手ヴィリー・ブルメスターが本作の創作を後押ししたが、経済的な事情から初演が急がれた結果の奏者の交替と準備不足から、初演は不評に終わる。シベリウスは作品を取り下げて大規模な改訂を施し、翌1905年に現行版が完成した。その初演の独奏もまたブルメスターではなく、結局彼は生涯この曲を弾く機会を得なかった。

第1楽章 アレグロ・モデラート 冒頭、独奏ヴァイオリンが息の長く神秘的な第1主題を歌い出す。第2主題は変ニ長調で提示され、独奏は6度の重音やオクターブにより技巧をこらしながらヴィオラ独奏の対旋律と対話する。展開部はまるごと独奏カデンツァに委ねられており、名人芸の披露がそのまま音楽の劇的展開の中核を担う。楽章は急速なパッセージの連続の中、劇的な高揚のうちに閉じられる。

第2楽章 アダージョ・ディ・モルト ^{めいそう} 瞑想的な緩徐楽章。木管の温かな序奏に導かれ、独奏が深く豊かな響きで息の長い変口長調の旋律を歌う。重音奏法を交えつつ感情の起伏は次第に高まり、やがて音楽は静寂の中へ溶け込むように消えてゆく。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・タント ロンド形式のフィナーレ。前楽章の静寂を打ち破るように、ティンパニと低弦の刻みに乗って、独奏が荒々しくもリズムカルな舞曲風の二長調の主題を提示する。遊び心のある第2主題を挟みながら音楽は発展し、最終的に野性的なエネルギーに満ちた熱狂のうちに幕を閉じる。

〈山本明尚 音楽学〉

作曲：1902～04年（1905年改訂）／初演：1904年2月8日、ヘルシンキ（ヴィクトル・ノヴァーチェク独奏、作曲者指揮）。改訂版初演：1905年10月19日、ベルリン（カレル・ハリーシュ独奏、R. シュトラウス指揮）／演奏時間：約31分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

9/13

横浜マチネー

9/15

名曲

Program Notes

ショスタコーヴィチ

交響曲 第10番 木短調 作品93

1953年3月、ソ連の最高権力者スターリンが世を去った。ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）が8年ぶりの交響曲に着手したのは、その数カ月後の夏のことである。1948年2月にショスタコーヴィチは、プロコフィエフやハチャトゥリアンらとともにソ連共産党から「形式主義」と批判される。戦勝を讃える荘重な大作が期待されていたにもかかわらず、〈交響曲第9番〉（1945年）を軽妙洒落な作品として発表して肩透かしを食わせたことも、この事件の伏線となっていた。これにより「反人民的作曲家」という屈辱的な烙印を押されて公的な地位を追われたショスタコーヴィチは、しばらく交響曲の筆を断っていた。

独裁者の死が転機となり、社会に漂いはじめた変化の予感の中、本作は1953年の夏から秋にかけて一気に書き上げられ、同年12月、交響曲第5番以来数々の初演を託してきた盟友エフゲニー・ムラヴィンスキーの指揮により初演されるや大きな反響を呼んだ。翌年春の作曲家同盟での大討論会では、この作品を巡って真っ二つに意見が割れた。体制側の保守派が「人生に怯える神経症的なインテリの姿だ」と非難したのに対し、擁護派は「闇の力との英雄的な闘いだ」と反論するなど、単なる音楽の好みを越えたイデオロギー闘争にまで発展したのである。いっぽう作曲家自身は本作について「何か特定のものについての作品ではない。ただ、大きな動揺を体験した人間の感情を表したかった」と述べるにとどめ、標題的な内容については口を閉ざしている。とはいえ、本作はスターリン時代への応答として読み解かれることも多い。実際、音楽に目を向ければ、暴力や恐怖を思わせる形象や、作曲家自身の署名であるDSCH音型（レミドシ）が顕著に表れるなど、何かを象徴するかのような音型が随所に顔をのぞかせている。その一方で、ショスタコーヴィチの個人的な恋愛に関するほのめかしも見え隠れするなど、多層的な意味をなしている交響曲だと言えるだろう。

第1楽章 モデラート 拡張されたソナタ形式による、重厚で長大な楽章。作曲家自身「英雄的で劇的な瞬間よりも、緩やかなテンポや叙情的な瞬間の方が多い」と語っている。低弦のうねるような動機から第1主題が立ち上がり、静かな歩みは管楽器が加わるにつれて緊張を増していく。いくぶん舞曲めいた伴奏の上でフル

ートの低音が奏でる第2主題は、どこか諧謔的だ。二つの主題が絡み合いながら全合奏の激しいクライマックスに達し、やがて冒頭の静けさに立ち返って幕を閉じる。

第2楽章 アレグロ わずか4分あまりで駆け抜ける、凶暴なまでのスケルツォ。スネアドラムに追い立てられる行進曲調の音楽は、一切の息継ぎを許さない。

第3楽章 アレグレット 謎めいた舞曲風の楽章。ここでDSCH音型が作曲家の署名として曲中初めて明確な姿を現す。さらに中間部でホルンが繰り返し吹き鳴らす5音（ミラミレラ）の音型は、当時作曲家が親密に手紙を交わしていた教え子のピアニスト、エリミーラ・ナジーロワ（1928～2014）の名にちなむ（E-L-Mi-Re-A）と解釈されている。となると、自らの署名と想い人のモチーフが交錯する、交響曲の中でもとりわけ私的な楽章だと言えるだろう。

第4楽章 アンダンテ～アレグロ 序奏付きのソナタ形式。物憂げな序奏では、オーボエをはじめとする木管楽器が謎めいた旋律を歌い交わす。どこか調子外れなクラリネットの合図によって主部に入ると、音楽は一転して快活になり駆け出していくが、その頂点で第2楽章の暴力的な楽想が回帰し、DSCH音型が全奏で叩きつけられる。しかし音楽は再び立ち上がり、そのままの勢いでDSCHが何度も（ついにはティンパニで！）執拗に繰り返される。祝祭的でありながらユーモアも感じさせる、華々しい幕切れである。

〈山本明尚 音楽学〉

作曲：1953年夏～10月／初演：1953年12月17日、レニングラード（現サンクトペテルブルク）（エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィル）／演奏時間：約57分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン、銅鑼）、弦五部

9/13

横浜マチネー

9/15

名曲

Program Notes

グラスノフ

演奏会用ワルツ 第1番 二長調 作品47

9/19
土曜マチネー

9/20
日曜マチネー

Program Notes

ロシアのアレクサンドル・グラスノフ(1865～1936)は、チャイコフスキーやリムスキー=コルサコフに続く世代を代表する作曲家である。11歳で作曲を始め、1879年から2年間、リムスキー=コルサコフのもとで作曲を学び、16歳で交響曲第1番を書き上げた。その才能を音楽事業家で出版者のM. ベリヤーエフに見出され、1884年には彼とともに西ヨーロッパを旅行し、ワイマールで最晩年のリストの知己も得た。1888年に指揮者としてデビューすると、翌年にはパリ万国博覧会で交響曲第2番を指揮して成功を収めるなど、音楽家としてのキャリアを順調に積んでいく。創作活動が本格化するのは1890年代に入ってからで、5曲の交響曲、2曲の弦楽四重奏曲やバレエ音楽〈ライモンダ〉(1898)や〈四季〉(1899)等を完成させた。

その音楽は、師であるリムスキー=コルサコフから華麗で巧みな管弦^{あふ}楽法を受け継ぎ、尊敬するチャイコフスキーの音楽を思わせる豊かな叙情性に溢れている。1893年(作曲に直接関係ないがチャイコフスキー最後の年)に書かれた演奏会用ワルツ第1番は、のちに手がけるバレエ音楽を先取りするような優雅さと華やかなオーケストレーションが特徴である。

鐘のようなハーブの音色が輝く導入(アレグロ)に続き、主部(テンポ・ディ・ワルツ)に入ると、3拍子のリズムによってクラリネットとヴィオラから夢見のようなワルツの主題が登場する。ノスタルジックな楽想をはさみ、ワルツの主題は優美なオーケストレーションで再現される。終結部は、金管楽器も力強く加わり、祝祭的な雰囲気となり、堂々と結ばれる。初演は、1894年1月にベリヤーエフが主催するロシア交響楽演奏会で、リムスキー=コルサコフの指揮により行われた。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1893年／初演：1894年1月31日(西暦)、サンクトペテルブルク／演奏時間：約11分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール)、ハーブ、弦五部

9/19

土曜マチネー

9/20

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

まばゆいばかりの輝きを放つ、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）のヴァイオリン協奏曲。今日では最も人気の高い協奏曲のひとつとされるが、作曲当時の評価は全く異なるものであった。

1878年、スイスのレマン湖畔クラランに滞在中のチャイコフスキーのもとに、モスクワ音楽院の教え子でヴァイオリニスト、ヨシフ・コーテク（1855～85）が、たくさんの楽譜を持ってやってきた。なかでも、スペインの民謡や情緒を採り入れ、独奏ヴァイオリンが活躍するラ口の〈スペイン交響曲〉（1874）を大変気に入り、それに触発されてロシア情緒あふれるヴァイオリン協奏曲をひと月ほどで完成させた。すぐにレオポルト・アウアーに初演を依頼するも「演奏不可能」と拒否されてしまう。それから3年後、アドルフ・ブロツキーの独奏で初演された。

しかし、初演の評判は^{さんたん}惨憺たるもので、難易度の高い演奏技巧に対して、「もはや弾くのではなく、引きむしられる」と酷評され、音楽全体に広がるロシアの民族色も否定された。それでもブロツキーが繰り返し演奏するうちに人気は高まり、後にアウアーも、さらに彼の弟子たちも弾くようになった。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ ロシアの広大な大地を思わせるのびやかな第1主題、叙情的な第2主題がともに独奏ヴァイオリンで示される。カデンツァは展開部の最後に置かれ、独奏ヴァイオリンの美しいトリルに導かれて再現部となり、華麗な技巧に彩られながら力強く結ばれる。

第2楽章 カンツォネッタ アンダンテ 木管楽器の導入に続いて、独奏ヴァイオリンが憂いを帯びた甘美な歌を静かに歌う。そのまま切れ目なく終楽章へ。

第3楽章 フィナーレ アレグロ・ヴィヴァチッシモ 管弦楽の躍動に導かれ、ロシアの民俗舞曲風の歯切れの良い第1主題、テンポを緩めた第2主題が示される。オーボエ・ソロから始まる木管楽器のアンサンブルも美しい。最後は第1主題をもとに熱狂的な高まりのなかで結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ラフマニノフ

交響的舞曲 作品45

セルгей・ラフマニノフ（1873～1943）は、1917年末、ロシア革命勃発で緊迫する祖国を離れ、アメリカに渡った。新天地ではピアニストとしての活躍が期待され、華やかな成功を収めた。名声と経済的に恵まれた生活を手にしても、ロシアへの望郷の思いは募るばかり。その思いは年齢を重ねてなお一層強くなった。

ラフマニノフにとって最後の作品となった〈交響的舞曲〉は、A.トルストイの『サトコ』の望郷の詩から着想を得て、1940年に作曲された。そこには当時の彼の心情を表すかのように、^{ゆううつ}憂鬱な思いと郷愁の念が入り交っている。当初は、3曲から成る「幻想的舞曲集」として発表する予定で、各曲に「朝」「正午」「晩」とタイトルが付いていたが、途中で「昼」「黄昏」「真夜中」に変更され、最終的にすべて削除され、〈交響的舞曲〉となった。ラフマニノフはこの作品について、「何が起こったのか自分でもよく分からないが、おそらくこれが私の最後の^{きら}煌めきだろう」と語り、楽譜の最後には「主よ、^{なんじ}汝に感謝す」と記された。

第1曲 ノン・アレグロ ささやくような序奏から、力強いリズムの主部に入る。中間部（レント）はアルトサクソフォンの哀愁を帯びた旋律が美しい。主部が戻り、最後に交響曲第1番（1895）第1楽章の主題が長調で現れる。初演が不評に終わり、精神衰弱に陥るほど打撃を受けた交響曲を引用して人生を振り返ったのだ。

第2曲 アンダンテ・コン・モート（ワルツのテンポで） 鋭いリズムの金管楽器のファンファーレが区切りとなり、ワルツの主題が濃厚な表情で歌い継がれる。

第3曲 レント・アッサイ～アレグロ・ヴィヴァーチェ 力強い和音で始まる序奏にもグレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉が暗示されている。快活な主部は、暗く激しいリズムで壮大に広がり、中間部はラフマニノフ特有のロマンティズムが現れる。〈怒りの日〉や無伴奏合唱曲〈^{ばんどう}晩禱〉（1914～15）第9曲の旋律が何度も引用され、最後は、ロシア正教の鐘を思わせる銅鑼^{どら}が響きを止めずに鳴り響く。故郷への思いと若き日の情熱、自身の足跡を音楽でたどるかのようだ。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1940年／初演：1941年1月3日、フィラデルフィア／演奏時間：約35分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、鐘、銅鑼）、ハープ、ピアノ、弦五部

9/19

土曜マチネー

9/20

日曜マチネー

Program Notes